View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

中澤興起先生のご退職に寄せて

島　田　晴　雄
鹿　嶋　研之助
近　藤　真　唯

中澤興起 先生

謝辞

島　田　晴　雄

中澤興起先生が本年3月に定年退職を迎えられました。中澤先生の千葉商科大学への長年に亘るご貢献に対し，学長として心から謝意を表したいと思います。

中澤先生は，本学商経学部の昭和42年のご卒業生で，平成9年に商経学部専任教員として着任されました。以来，本学における商業教育に多大なるご尽力をくださいました。本学は商業の教員を多く輩出していますが，それは中澤先生のご指導の賜物と言っても過言ではありません。

また，本学卒業生教員の会である「教育研究会」を立ち上げ，その会長を務められています。今年，教育研究会は創設20年を迎えていますが，20年持続しているのは中澤先生が脈々と後進の育成に努めてくださっているおかげだと思います。

中澤先生と言えば，忘れてはならないのは「キッズビジネスタウンいちかわ」です。中澤先生が，「子どもたちがつくる，子どもたちの街」をコンセプトに，地域の小学生児童や幼児に向けたビジネス教育の一環として，2003（平成15）年からはじめられた取組で，今年13回目を迎えました。本学において最も大きなイベントの一つにまで成長し，地元市川はもちろん，周辺地域社会からも大変高い評価を戴いています。メディアの関心も高く，実学教育を教育理念に掲げる本学の特徴的な行事となっています。

日本各地の高校や教育委員会からは，是非自分たちも開催したいとの声が寄せられるようになり，今や本学発の「キッズビジネスタウン」は北海道から沖縄まで全国各地で開催されるようになりました。実施にあたって中澤先生は各地で指導をされています。

「キッズビジネスタウンいちかわ」は，地域の子どもたちの商業教育だけではなく，本学学生にとっても地域社会への貢献を行いながら商業教育を学び，また子どもたちの育成を学ぶという，正にアクティブ・ラーニングの場としても活かされています。

このように千葉商科大学に多大なる貢献をしてくださった中澤先生に，心より感謝申し上げ，これからも母校である千葉商科大学のますますの発展にお力添えをお願いしたいと思います。

中澤興起先生のご退職に寄せて
出会いから45年，そして“偉さ”実感の15年

千葉商科大学商経学部教授　鹿　嶋　研之助

1971年，東京都立情報処理教育センターで中澤興起先生に初めてお会いしました。その年，私は東京都の教員に採用されたのですが，9月から3ヶ月間の情報教育研修を受けることになり，最初の研修場所が情報処理教育センターだったのです。センターでは何人かの方に指導を受けたはずですが，なぜか中澤先生の記憶だけが鮮明なのです。それは多分，先生がまだ20歳代半ばであったにもかかわらず，風貌が今とあまり変わらず，加えて態度，話し方に貫禄があったからだと思いますが，あるいは未知の機器で，巨大な装置であった当時のコンピュータを操る先生に畏敬の念を抱いたからかもしれません。

研修後，情報処理教育センターでの生徒の実習を引率した際に，また都教委の会議の場などで何度もお会いしましたが，ほぼ同時期に，中澤先生は川口短期大学に，私は文部省に転出したため，お会いする機会がなくなっていました。奇しくも2000年に私が本学に着任して再びお会いすることとなり，以来，15年余にわたって，一緒に仕事をさせていただくことになりました。

15年余の本学でのお付き合いで心底より感服していることは，中澤先生の諸事にわたる実行力と学生への指導力，そして，それらを発揮して上げてこられた数々の業績です。

'03年から5年間（実質的にはそれ以前，それ以後においても），教職課程の責任者として本学における教員養成の基盤を築き，商業科教員をはじめ多くの教員を輩出されるとともに，OB・OG教員を「教育研究会」に組織して現職研修の機会を提供してきたこと，'08年から4年間，学生部長として多様化する学生の指導の舵を取られたことなどは，本学における先生の大きな業績・貢献であります。また，日本商業教育学会の事務局長，会長を歴任されて，我が国の商業教育のリーダーとして活躍されたこと，3期にわたって文部（科学）省の学習指導要領（商業）の改善に関する調査研究委員・調査研究協力者を務められるとともに，（独）教員研修センターから委託されて，本学で産業・情報技術等指導者養成講座（情報，商業）を開催，運営されていることは，先生の社会的業績・貢献であります。これらの業績だけをとってみても中澤先生は“偉い”のですが，私に先生の“偉さ”を最も感じさせる業績は，「キッズビジネスタウンいちかわ」を構想し，実行に移したこと，しかも，学生に企画，運営を委ねることができるまでに彼らを指導して来られたことにあります。「キッズビジネスタウンいちかわ」で発揮されてこられた中澤先生の実行力と指導力は，と

うてい私には手が届かない資質，能力だと感服するのです。

改めて紹介するまでもなく，「キッズビジネスタウンいちかわ」は，'02年度から開催されている，地域の小学生などを対象とする本学と地域との連携事業です。小学生などに職業体験をさせる活動は，古くはジュニア･アチーブメント（アメリカに国際本部を置き，現在，世界129ヶ国で事業展開をしている経済教育団体）の活動などとして始まり，我が国では'90年代後半から公益社団法人ジュニア・アチーブメント日本の「スチューデントシティ」（現在は「わたしたちのまち」）プログラムとして行われていました。現在，京都市教育委員会や品川区教育委員会は，ジュニア・アチーブメント日本の協力で立ち上げた「スチューデントシティ」での体験学習を，小学校5年生全員を対象に実施しています。

中澤先生はドイツのミュンヘンで行われていた就業体験や千葉県佐倉市で行われていた「ミニさくら」を参考にして「キッズビジネスタウンいちかわ」を構想されたということですが，その独自性は，「キッズビジネスタウンいちかわ」が子どもたちの社会体験の機会・場であると同時に，指導する学生の学習－企画力，実践力，指導力に加えて，リーダーシップやフォロアーシップといったチーム力，コミュニケーション能力そして忍耐力を養う－の機会・場になっていること，特に，教師を志す学生にとっては，教師に求められる能力・態度を養うまたとない機会・場になっていることにあります。毎年，中心となる学生が入れ替わる中で十数年にわたって開催し続けられているのは，中澤先生の指導力の賜に他なりません。退職後にあっても，お目付役としての活躍を期待してやみません。

中澤興起先生：教育と「敬天愛人」

近　藤　真　唯

「敬天愛人」

西郷南洲（隆盛）翁の遺訓にある言葉です。この遺訓にはこのように書かれています。「道は天地自然の道なるゆゑ，講學の道は敬天愛人を目的とし，身を修するに克己を以て終始せよ。[1]」私なりに解釈をすると「学問を研究するということは私利私欲のためではなく，天を敬い，人を愛するために行うものである。そのためには己に勝ち続けていかなければならない」。教育に置き換えれば「教師としてあり続けるためには，私利私欲を捨てて，子どもたちのために奔走しつづけなければならない」ということだろうか。

この言葉は，私の師である中澤興起先生がゼミ卒業生に向けて贈った言葉です。私も2006年にこの言葉を頂戴しましたが，当時は深く理由も考えずに先生から贈っていただいた程度にしか考えていませんでしたし，実際のところほとんど忘れ去っていました。これは中澤先生のキャッチフレーズである「生涯一教師」という言葉の印象が強く，またその言葉が教員として巣立つ学生の身には非常にわかりやすかったため，「敬天愛人」という言葉を忘れてしまっていたのかもしれません。

中澤先生と知り合うきっかけは，私が千葉商大学部生として在学していた2002年に遡ります。商業科教員を目指すために入学した私は，商業教育界の大御所である中澤先生の門を叩きました。それまでの商業教育の変遷から最新の商業教育事情まで幅広くご指導いただきましたが，普通科高校出身の私にとって目から鱗が落ちる経験は一度や二度ではありませんでした。交友関係も広く，教科書著者や様々な教育方法を実践されている先生方をご紹介いただくなど，通常の大学生ではなかなかできない経験を積ませていただきました。また大学職員の方とも親交が深く，中澤ゼミ生というだけで我々学生は可愛がっていただき，お陰様で「キッズビジネスタウンいちかわ」では職員・学生の密なる連携から大成功を収めることができました。このようなご指導があったからこそ，百人を超えるであろう卒業生教員を輩出できたのでしょう。

また，中澤先生は学生たちと酒席を設けることも大切にされていました。夜は毎日のように，今はなきリボー亭でリボー鍋を突きながら，焼酎片手に今後の商業教育について熱く語り合ったものです。学生たちが酒の力を借りて投げかけた疑問を真正面から受け止め，それに答えるだけでなく，更なる問題提起を学生に投げかけることで場を盛り上げて

(1)　山田済斎編（1939）「西郷南洲遺訓」岩波書店

くださいました。また，学生の無礼とも思える発言にも笑って済ませるだけでなく，その場を笑いの場へと転換させてくれる度量の大きな先生でもあります。

今回，中澤先生の退職記念文を寄稿させていただくにあたり脳裏を過ったのが，あの忘れかけていた「敬天愛人」という言葉でした。言葉の意味は前述の通りですが，調べれば調べるほどこの言葉はまさに教育者・中澤興起先生ご自身を写しているように思えます。いつなんどきも教師としてあり続け，私利私欲を捨てて，教え子や商業教育のために奔走する。おそらく先生は「敬天愛人」の哲学をもち，更に教育を志すわれわれ教え子たちにも「敬天愛人」の境地に達することを願っておられ，この言葉を卒業に際し贈られたのでしょう。遅まきながら，その時の先生の想いをわずかながらも理解できた気がします。中澤先生は退職された今もその姿勢は変わっておらず，精力的に活動されています。今後も「敬天愛人」の精神で商業教育界をリードしてくださることを祈念しております。

（2015.6.30 受稿，2015.7.22 受理）